

和漢三才圖會

皮肉骨之事

三ツハ物ごとにあるなり

ものぐさ

ものぐさ 方言 符合 俱ニ識意の名別よりて 鼻舌身意の六根共に 悟ることを志ざる 怠りの心よりむり 懶と云字なども 怠りの俗字とす 懶惰の世乃熱のさま

らく教へ給ひて教門を捨
体として古来より歌は自然
垂給ふ人ことわざ今世よ作と
えてる人々てこにもやうやうく
。肉は泡のおこるがごとし但心識無
らしぶ識と識ぶとわと
うの識は初めとはせりて
云情の字のごとくなり
云情乃字の識のこころ
此よりぶ〳〵此と草

鼈をあぐべし忘れとゝ
ろべし猶此書件ごとに
一をぬきそうんとかく
これをもつて
勿論の按に此書
見定めもの人作種八筆道の図とそろう成ハ
肉とそろう道庵ハ其等をそ
もとよりも勝れざるもの
一ともぞれば後成卿ハ実の書件ありて

又定めもの多れ肉件と
又皮肉骨の差をそ
人宝免ぶべし

㊄四道の事

○承遁 教道の字作ごとに昌ハ五十白
百句とそろう成ハ
如きまで多し連歌し
不ねん輪廻そのをたち
やうつゝもりみよ

此通り秋すゝ
○清水若白に打そゝいで
もうしひて申すこうまめ
おゝしこの玉垣の高く書くこと
き秋　○かくこそ
風もの境と今る奇れさす
俳諧　△玉の秋かうさ豪合の儒　喜角
○随いお白はもうごうく味いなお白よゝ如一きまと
もうぐいうめと作うく通とまく人事れお白よゝ

おゝこそまと絶やうゝ
みるくしこ風ふてま
き秋　○ひとぶのむさゝ
お村の風ゝ
俳諧　△兄弟とゝ伝草　実種　立花
○設いお白のことともうこ是お藤さ風情お続さ
まる時所要おすも
○天やうくゝ兄弟とゝ水迄でき秋で
又字のうこうるゝさ

主歌　○約人のとぢてこぐびあをこと　梅井

一面白ん絆衣つく

俳諧　△遠人の中よりぐらとを分て　ふかく

の連句の名句と頃ろ〳〵ばかり　相下ぐく

なんどたゞ人の西とをもて東とをもてそして則東

と付ける五体よき連句ぞ古今を抜ひ

みけるものとよき句ある當

連歌　○鷺鳥のまつ〳〵ある枕まくひまて　宗長

ひのくれて面白きもの

俳諧　ものゝさまを抜ものいはやうや　永友也

までの句ぬて大やう其人多くや名角也歌て

俳諧とてゞくをも同じ句をよまやうにも

このゝく毎度四道又起承転結破急とのごとく若

句ぬとさゞうり句り抜ん歌迄抜いかゞ抜人れ

付ぬんまでんぐ人皆悪かるべくも

㊀辰類く若別のるべくも

俳諧ゝ連歌ゝ同新ゝをもてはゝうきさ

俳論ぞく此若別ぬるべきやうや抜ぬ若ゝ

風類にて人めも知とおもふ
ゆゑよしをもとめ船をうかべてもむかしの
ゆかりもたづねまほしきは片田舎なりとも
ふるき世の人にこそあれ其ゆゑよしかの
ことばのごとくなるべし扨又風情の
言葉にこそ有べし
一首にこれまでこそ分別
して必ずおくるべし

それが昔し有家卿末代まで
年とうたひて恨よ雅経のおぢ
ばまでけるハもとより
おくり名をしるし

春霞たてるやいづこみよしのの
もろこし舟の
もろともにかへるさの
むれ立て冬のわかれをこしの白山
桜咲花盛りをこそ白山
作者いづまでもこれ不定のうたをよむべし

いうぐうと云ぬの白みくもれるくらゐの人と犯そる
心詞人の白ととうぐうぎしてあるまでであるべし
又云　○邪とそそいとうぐうぎしてあるまでであるべし
○ふことと邪の字は同じ字也
此白同じ字也
修善よ修ふ○善を志ざりがてら分別約要
向ふ類多しといふ
いとうぐうの人くとよあるまじかりぐてうぐうぎしてあるまでと。

宗初
智益

つうぢのくの中にもむくの類波の梢をよみ
そそやきまりと天よれりひろがりぬ
名月と天よれりひろがりぬ
天の雲よりもれ出る月の光
死の真のとおとく岩つゝ
かくのどくれ動ぐぞあるよとぬあつべたりみじぐぎる
又云　○むこれかたくゆいちんの浄土

○立花いろいろのやう

色あり詞いろいろとよへどもこゝに出(イデ)ず各別之(ベツノ)事

案(アン)と俗(ゾク)に焼(ヤキ)の案入(アンイ)と云(イ)ふ事(コト)あり

いづれも出(イデ)ずこゝに略(リヤク)す

と同(オナ)じ香炉(カウロ)をいろいろ名(ナ)し形(カタチ)を

別(ベツ)に加(クハ)へたるやうのもの此類(ルイ)と統(スベ)て

分引(ワケ)べきなり

此詞通(ツウ)の附合(ツケアヒ)大概(タイガイ)にて求(モト)人未詠(ヨマ)之(ノ)意(イ)と

雖(イヘ)ども俗(ゾク)に焼(ヤキ)の案入(アンイ)と云(イ)ふ事(コト)あり

詠(ヨム)べからず

雖(イヘ)ども求(モト)人未詠(ヨマ)之(ノ)意(イ)とそ

わづらひ但(タヾ)求(モト)人未詠(ヨマ)之(ノ)意(イ)とそ

雖(イヘ)ども実(ジツ)に詠(ヨム)べからず

雖(イヘ)ども世(セ)の中(ナカ)の初(ハジメ)て

雖(イヘ)ども月(ツキ)の名(ナ)なれば

わづらひ但(タヾ)求(モト)人未詠(ヨマ)之(ノ)意(イ)とそ

雖(イヘ)ども実(ジツ)に詠(ヨム)べからず

雖(イヘ)ども月(ツキ)の名(ナ)なれば

雖(イヘ)ども月(ツキ)の名(ナ)なれば

とのもじがむつかしくてよめぬ悪人ども
おれ類いあつまつて今もつて遣すことを見つけつてよぶ
事もし但又今何の飛鳥とやらくさ多くさかつべし
作者ともつかぬ自作人を頼むにもつかぬ自慢のがるよ
あつめ作者でうろうろそこらおほひとさがりあり扨
とのれがちひさうあつて付作者でやいやいうべ
きまた字のと唐人おうりやうしちまた字をよくあつめぐつまる
人作とあつてここまた曼流接しまた書ちそこまた意
味作易はまた只字一首のほうこと楽しとうそう
なつてやうに練(ネリ)て自慢(ジマン)と称め相人うて指る通
それは真心とそうぐうそこまたそのもくが胸
乃中ちやぐちまるもつぐんもそうべくく

(生)連歌俳諧之癖病

○等つまらぬ事つまらぬ病ともいふ一同心病二乱思病
三煩蝶(ハンテウ)病四渚鴻(チヨコウ)病五花橘(クワキツ)病六老楓(ラウフウ)病七中飽(チウホウ)病
八後悔(コウクワイ)病已上八病又一岸樹(カンジユ)病二風燭(フウシヨク)病三浪船(ラウセン)病

瘍落花病　已上四病　又頭尾病　二腰尾病　三薄尾病
四厭子病　五遊風病　六聲韻病　七遍身病　等　但
毛おち時れ判者乃ちよくもおいろくなる
もの也　是等ハ皆ことごとく抱連歌俳諧するもの也
ゝ〳〵こゝろ

㊄いろかゞといふ事

○哥こゝろいろかゞとてつゞるもの也　俳諧ハこゝろのいろかゞすぐれ
まことこゝろや君乃いろかゞ

是等ハ皆ことごとく俳諧の人乃もてあそばれど和哥文字おお
いろかゞなるべし　抱玄いふごとくこゝろ
ばくやく劍てまと初やもこゝろ
又　抱玄也君のこゝろの採り
當来式五文字

通陽のまち（マチ）

[illegible]月の[illegible]ども
是等十七首の中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
付[illegible]
[illegible]
[illegible]

(九)未来紀之事

[illegible]連歌[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

古今よみ人しらず

其二つ 桃指ゝ〻人桃指伊ゝ〻

指ゝ〻ゐ〻べ〻〻も〻

中ゝ〻ま〻哥紀桃指指伊ゝ〻

蟬人彼面甲吟ま〻哥紀

ゝ唯〻〻ゐ〻べ〻桃指の底中ゝ〻ま〻紀うゐべ当

ゝ〻〻〻〻〻〻

伊白

やゝ〻ゝ〻雖〻〻〻〻〻〻

伊白

〻〻〻〻〻〻

答云寺よ多(ク)て。とくも歌乃遠(ク)より集(ツ)どひ乃ぼ

○月やうる水乃おもてやうらやまし

○ものや悲(カナ)しきうつゝ弁(ベン)も夢といふ物乃ごとくに

その物乃ごとくにまれも夢とこそ

よゝとたゞ一ことは云ハえてそ落(キリ)涙不絶又字

数乃合せて机とくも一ツもおそきよ

つゝ出(イ)でゝこそこゝろとのまゝ

ハうくもそくて人のいろも出(イ)

ぬ(ヤハラグ)閑(レンボウ)と耳(ジ)うちうて

味(アヂ)ハゝ(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ乃合(アヒ)ゝ半(ハン)紙

乃ごとくなるべし

◆草乃出(イ)ぬやう白(シロカミ)紙乃多

乾(ヒ)ぬ前(マヘ)とゝのへ置(オ)くべし

綴(トヂ)よう乃ゝ(ヒ)ゝ(ヒ)ゝて筆(フデ)執(ト)ル

不(ズ)自由(ジユウ)なきやう乃ゝ(ヒ)ゝ(ヒ)ゝ

◆二ツ尾乃蛇(ヘビ)よりハ

その類(タグヒ)乃頑(カタ)ゐ男(ヲトコ)ハ不(ズ)

よくの野ゝ路多(タ)ゝずみ

(三)隔句作る事

○連歌は発句より一句ごとに違異を以て次第に移りもてゆくものなれば、前句と付合の縁ありてもまた縁なくても、其句の意味を以て次の句を付るなり。されど風情ことばともに前句と同じからざるやうにすべし。たとへば雨中の句に雨中の句を付るやうなるは、前句と同じ意味なれば、是を隔句といふ。先一句おきて付る意味なり。

○発句と脇とは一句ごとに違異を以て次第に移りもてゆくものなれば、前句と付合の縁ありてもまた縁なくても、其句の意味を以て次の句を付るなり。されど風情ことばともに前句と同じからざるやうにすべし。たとへば雨中の句に雨中の句を付るやうなるは、前句と同じ意味なれば、是を隔句といふ。先一句おきて付る意味なり。

○連歌は発句より一句ごとに違異を以て次第に移りもてゆくものなれば、前句と付合の縁ありてもまた縁なくても、其句の意味を以て次の句を付るなり。されど風情ことばともに前句と同じからざるやうにすべし。たとへば雨中の句に雨中の句を付るやうなるは、前句と同じ意味なれば、是を隔句といふ。先一句おきて付る意味なり。

(三)隔句作る事

○連歌は発句より一句ごとに違異を以て次第に移りもてゆくものなれば、前句と付合の縁ありてもまた縁なくても、其句の意味を以て次の句を付るなり。されど風情ことばともに前句と同じからざるやうにすべし。たとへば雨中の句に雨中の句を付るやうなるは、前句と同じ意味なれば、是を隔句といふ。先一句おきて付る意味なり。

○連歌は発句より一句ごとに違異を以て次第に移りもてゆくものなれば、前句と付合の縁ありてもまた縁なくても、其句の意味を以て次の句を付るなり。されど風情ことばともに前句と同じからざるやうにすべし。たとへば雨中の句に雨中の句を付るやうなるは、前句と同じ意味なれば、是を隔句といふ。先一句おきて付る意味なり。

○連歌は発句より一句ごとに違異を以て次第に移りもてゆくものなれば、前句と付合の縁ありてもまた縁なくても、其句の意味を以て次の句を付るなり。されど風情ことばともに前句と同じからざるやうにすべし。たとへば雨中の句に雨中の句を付るやうなるは、前句と同じ意味なれば、是を隔句といふ。先一句おきて付る意味なり。

さて是と秋風の袖うちそよぐ句中一つの句
をあらはす句通ふなり此句法猶
うたふべき事也
▲うたふべきことひとつ
毛立つ字と中ようづ抜てもよくおもてそうはうへ
ひとつとを通ふ句なれば作者のこころざし
中一つひとつやうづきの句とうづきもの
おろ〳〵ときゝ聞へきのまとゞ
うつそ〳〵やとひとつあれをもつ〳〵
ひとつめようはうへつゞけてうはつ乃句下のごとく
通ふなり又中(ニテキ)間の句とそ
こゑさへのびる大やうよう
い通ひてるすまてうたふべきなり

(三十) 首切之事

○首切と云ふ五文字七文字つゞけ連歌よりおこる事也
○夜さり漆茅が原乃里うて
此句夜さりあさぢとへづぐうと
○夜さり里に漆茅さゝやかれて

とゝ同じ五七五也（レンノ）續（レンノ）して

▲かうだ（ギ）きうあにいけうとく（カウ）（リウ）

もうだ（ギ）きうとくはもと八一字にして七文字也（レンノ）續（レンノ）するゝ

㊱冠ものとく

○冠ものとゝすれば上は五文字二句よむ事不レ可

○もゝ實ものとゝすれば油ゝゝゝゝ

うくひとゝゝれぬ油ゝゝゝゝ

なぐさ類こまづ柿本人丸付ル縁ニて中の巻之ゲる用ニ不堪

(廿六) 岩くらうどころ

○是ハ五文字七文字ノ縁ニ続ケてよめる歌ニて人の沖ハ私

○故郷とあるまでハ五文字ニもまたがらず枕詞ニてころ

ゝ云句ニ下ハ五文字ニ用ユル不知ゆゑべし趣てもよろしからん

▲信吾やそふかもちかてとも

よろしからず是ハ五文字ニ用ユル不知ゆゑべし趣てもよろしからん

歌ニハ縁(エン)云ゝとあるとすれバ有なるべし

枕詞ニハ縁云連続しくるゝ古風ニ面白くこゝろをよめる

ゝとて初のつゞくるゝ頃(ころ)迄の枕詞ニ不用ユル不知ゆゑべし

(廿七) 鶺鴒(セキレイ)花とよろ

○此ニハ連歌ニ用ユル枕詞ニてきこゝろ歌ニ用ユるニ不堪

遠見の等ニ多くあるとすれバ也歌ニも

○雨ニ降こめられてとみにくらすころ

○雨ニ降こめられてとみにくらすころ

○雨ニ降こめられてとみにくらすころ

当一歌とこれと我(ア)雛猪こてふで
雨ふれもやくこととおもふ
◆林しさい鶯なくべし糸白とぬく草にして付くる也(モ)桃のけふ
是等なども(ア)べし糸白とぬく草にして付くる也林
さびたる詞とそこてなく縁こを桃のけふ
もひきこと(ア)べし糸白ぐりこせてまみも
たゞ通具卿と多くこんけふ通よこととうずず
ぬつるゝくなるもおこなる白糸(久三井)魂とえこをぬあるべし
(廿八)四月付とて傳ふる説ありしかし今は然らず
(廿九)元成付こまし
○此四こ付と云ふひしかし付絶と專よせしかし付ありしかし今は然らず
○旧ぐ(ア)べし
もとしてるふるゝ橋よ本如よるる旧ふてしもを
ふぬるこ雛猪こふくこ(ア)べし
○当一歌こて雛猪こて元成付と云ふ個所猪こ今ハ不
ね此元成と云こて傳ふる当一歌こて元成付と傳ふる

みそを煮ハ粕人とも云よ
同と尖よ云ゐくるを不宜ゟ〻雪卵雪川雪ぞと
一ふるゟ〻らんと雑詠会雪と雪ハ風よ海ひるるおどと
雪八風よ海ひるるおどと一家と付雪ゟ〻右井お
とと付くゟ〻ハ雪ゟ〻ハ雪ゟ〻ハ雪

草うごくまで〳〵ろくでなし仲間

△前書

見ると前書きがあるとそれを読まうと

うと〳〵とろ〳〵うたゝ寝

(四)又思惟もつくさず初をあるべし

曼荼羅と分別して色と作るべきなり答ふ

見ればそれぞれ一夜浦

同じくおがみ居てあるべし

(二井)そなたも毒居て

(三井)ひとりに毒居して

(二十井)毒居して

見るがごとく色と作るべきなり答ふ

名月を待ちかねて人々うち寄り月を待つ

名月と今やくと毒居して

と云ふ句の下句を聞きて

(四)そのまゝ

○毛二毛の魂あるんぢゃとうぐわとうするこゝろ

一人とう打こゝろ

此るたんこゝろとくろうとくろうそ一毛よこゝろ

のうりてたゝこゝろ魂（タマシヒ）とうれば生てゐます

一人とう打こゝろ

おゝこゝろそこゝろ生ゆべあれやうれ毛こゝろ

時は真赤るとうりてこゝろたゝ大きよ場ありますこゝろ

ぐんなまうこゝろくくなくばぐんなるこゝろ

（三）自他の差別不分明の事

○此気自と他と一毛よ入組て不分明の事

湯のこゝろや早し

くのぐくの麹こ湯とのこゝろ

切よてゝ早乙女八他人（リ）こ号（コレコバ）自他打まぐるみたこと

一毛ん落着せねこあるはこゝろ

八ツあるのうちべゝ自（ウチソト）外までの

陸（ヲカ）ん此こゝろゆることゝ決とうりう

いつくなるみ八今妻こゝろるは切ろうこゝろ

ゝ〳〵なるハあゝきこおるハみうち信みの心こゝろる

白なる紙をもつて作るなり

△晴雨共に草履を穿きおどり

付けおどりは白き足袋を穿く

白作等は作者それぞれ

(圖)五音主憲の事

此事よろしくつとめて五べき事

い縁云と第一とこれありやいなや五べし縁云

時は五音共にあてはまりてゐるとうべし答い

△実にのやうに聞ゆるなり

まとびと「まとびとは五音と云ひ伝へと五音

取て五七五の縁切をするなり

時うくのとくに五音と通ひそなき

五七五八縁云をなく五音と通ずるなり相伏のまま歌俳伏

の如猶そくちあきしぬすく但此相伏とは言ふ

云人とのひとやうにあるべし歌方

とある時ちく歌の悪心とやうげん

とちくするとち事と悪会悪魔とちくちぬ

答い病人行縢をつけ病とうるなり

おく連歌などする人〻しばしば
しばや ゆるやかにおぼえ
ぬ語は知るまじきことなり
ぎるとて 月の花の
ぎゝすることもまた
ある人のおくのごとくに
さゝやきつゝむべし
無自覚なる各別
とてもかゝる
まゝなどゝ第八句
撲(モ)ぐるゝ 風(フウ)
とゝの類但し
つゝみぐるゝ
と付て吟味
異 体の字
○此の字
先ひろう
とゝ外(ホカ)

片(コト)

風(フウ)

相撲と相

風(フウ)を屏風(ビヤウブ)

ひろう

又あの方まるとうとうあ
もしひとつれそ　もしあいて字
とうすれ　是おの字よ　泥　泥文字
また　あるいはこのごとき　此類ひろ
圏同意の事
○連歌し俳諧とおなじ打紙かな
わるべきなり打紙のつぎめと
同とを嫌ひさぬひさぬ
なぐ〳〵分るる　是もやうに
あて　さうまた歌の格の如
より別もちがひ　松のみの
いつぐ〳〵まで　松のみの
よろしき　松枝あるそれを
有るまぐ〳〵　通ふんとつまて
そ〳〵とやて　枝のごとき
つよう　なてやるまぐ〳〵
うのあやて仕方をとすれ

名白ようず[illegible]
爺ば「ここの風情の白とき[illegible]
爺ば「ここ[illegible]
ここの[illegible]
[illegible]
(異本奇と乳柏くる)
○爺ば「くやしく泪をのんでくる[illegible]
此言ことくんあ「[illegible]
とくひきくる[illegible]
[illegible]

[illegible]
とも打くゝ表とうりよ招(オラビコ)
しこいうよとよ[illegible]
里打ことうつひとも[illegible]
てこのくゝをゝ[illegible]
て付まもこ又表白
中れ耳言ことうて
ともうう爺ば「[illegible]
[illegible]

つもの正ちくことのもの（但し不合
（墨）又むかしの老人などのをきとゝ
○これらと一様に宿のちがひて
祇備ふてゐるをとゝ
△うつくしき焼やうこゝろえぎ
△稗の団子やうなるそなへ
かゝる類いろ〳〵ありて
（墨）又若者のをきとゝ
○いかゞの祝ひをするやうそ
○老たるのばかりとゝやうん

あくまもとくうゞもち祝ひ若き者よりおの祖父などいまだ達者にいませ
ば祖父などいまだ達者にいませぬとゝ名まへ
抜き真実に老人の者ばかりよりは
こゝろの老の祖父などの名目十ばかり
うち若ものをといふやうなるもの
（墨）又老若備ふるをとゝ
○祖父母などの名目と注記（ハウ）されたるをとゝ
うんとゝもの〳〵喰ひ合ふるをとゝ
△かゝる意うんか袖の振ひやうを

此類いろ〳〵つゞく人〳〵今書綴
ゆる文句を常（タヽイス）べき人の身〳〵で
るるおもしろきもとまりきる
(五)述懐の部
○この部の題もとのごとく述懐の句を
首（かしら）に置（おき）ひとのつくる
首（かしら）の字とうへ海〳〵きものゝみわ
をもつて考（かんが）へ述懐の連歌の
おもしろきを入（いる）るよ
○右（みぎ）のごとく述懐の句を捨（すて）
年〳〵句と仍（よる）人〳〵つゞけ考（かんが）へ
○考（かんが）へるのさそうの人〳〵つゞけ
年〳〵句と作（つく）るものゝ心（こゝろ）を捨（すて）て
○恋（こい）の部
(六)恋（こい）の句意又は意（こゝろ）と言（いふ）
○恋（こい）の字意（こゝろ）をいれ見（み）恋（こい）恋（こい）
連恋（れんこい）恨恋（うらみこい）おもひ
恋（こい）こゝろやうよせめし男（おとこ）恋（こい）の
うらやめうらめしきと思（おも）ひつゝ
おりの言葉（ことば）通（とほ）りおのづから事（こと）

よりつゞめてもいふ仮名の一字をも字といふ
字は文字よりつゞめていふ事なり
とくこゝに字といふは仮名の一字をいふ
これおそれなれとこゝに「字」といふはそれらの数
なり故に下に「仮字十七字」とあり云々
とのつゞまりて名とするなるべし
もろこしの文字と引ちがへむ
ろこしの文字は一字一字に別に
むこさ多きが中うこ別に
岬テ云焉哉乎也なり虚字(キョジ)
唐土の虚字(キョジ)同じのよと楽(カン)に横字(ヨコジ)
あるべし彼てもおもてよとも傍(ソバ)
そうと答(コタ)ふるてもおもてもそれ
もとてそうるいうどうれ
しとそのうちと初の五字と傍すう云
ま云いてもおもとそうてもと
とうすべ若(モシ)この口無(クチナ)字(ジ)
仮名(カナ)よりつゞまりて

(五七)切字之事 場之

○奇字悉切字ある切字ならざる切字あり
切字ある句は其一句となほ絶る
とへ何絶る気味ひゞきある句尾もそこを指絶するゆゑ
尾ろこそのかゝりと句尾もそこをおさへそこを絶つゝ
なぐ〳〵留らずいそで猛将をかゝりや
と云時結句さうらふやはりまさしく毛等
うそ大やうさうひそかにくだくだしくこまごまと
切字二句の頭よりそれ迄の
二句の上中下あり此切字ありて上中よろ

ずうつりやすくそれ迄いろ〳〵述来りたる
よと終をかゝりて此等
遠のいてゆく也
うつゝべきれゝくゝ世代しゝとゝとゝ
おゝらいせゝくゝ気こゝ
答ものゝゝ物ゝゝ
字ゝれゝゝゝ切字ゝ前
同ゝゝゝゝ
ね等ゝゝゝ

●去年ともに雪見して	豊隆
今年ひとりや雪仰ぐ	勝利
●去年ともに雪仰ぐ	家風
今年ひとりや雪見して	一
雪ならば	訳重
いかにくるしき	政之
世なりとも	玄旦
心晴乃蜂の巣	同乃

風凪て出よ	真佐
硯出乍ら	玄寿
雪見哉	宗虎
雪見哉	宗虎
雪見哉	宗虎

ゐやとのまうすべうもあらず疑のやと
ぎ
ニハ疑ふよりおこるこゝろなれば
て得ゐひつさうろめ
え
ゐやうにおぼゆるとも
ゐやと人とこゝろづきて
ゐや
ゐやあるべしと
ゐや
ゐやうにおぼゆるとも
ゐや
ゐやうにおぼゆるとも
ゐや
ゐやうにおぼゆるとも

やハ拾やしとぐろする狗こ引
引かうでや引くうやぐ〳〵咯回し拾やこぐ〳〵ぐうう
此やよをてハ外多ハ多て多うまぐ〳〵こ第七仆合
ウやく〳〵上の五文字ハ二三の四ようやこ狗仆猫宅せ仆れの
ヨこそれ〳〵ぐうぐ〳〵それおく〳〵ハけやト通ひ〳〵そうも
それ仆〳〵とてとよ〳〵多るこいく〳〵此やかうさやこ
五文字ハ俗よ亜仆ハ文多れ(イロハ)こまうくるく等へ
多やちく〳〵ぐうくちうこうこ小家牧毛と書ちうや
とこ仆ハこまく〳〵多こ仮(クヒ)こまく〳〵めろよ七文字こ左ウる
おく〳〵治宅〳〵て上(ツ)迷せねあとトぐ〳〵ぐうよ同やも

多るこ文のうく〳〵当ハ仆牡丹と乃て感〳〵ぐ〳〵一句こ引うく草ハ仆こ
ヨこうる毛まてハ仆毛こ此外よ引やあ〳〵れな
ごの類うりてハ仆〳〵亜字こ彼中れやく〳〵こまかうる迄
引合とハ仆方へちく〳〵又倍ちや雀鴿や引うくのやかど
の類ハこ百れことこうんとて先(ツ)亜(ツ)ぐ〳〵仆知こ毛ハ仆と峠(たび)
出とやこ毛あうやうそトよ川多ハ多て多よおくこうしべ
右仆や捨や疑のや此こ仆ハ川てハ川てよぐ〳〵不当こ引
の押字ハ〳〵ぬこ但捨やハ仆ハ仆ハ仆

ふーと名は呼れうる
うるう〳〵笑〳〵ぞうる
よて伝へくるを
むふーる類するよ
ーるとゝ也ー

○実乃ー〳〵ふるよ
そうるうれぞうるむ
ふーれ伝みて残ー
ば彼己をのーと名法ルべ
ほうてもとりてて切ルて
おうぐ〳〵おうぐ〳〵
乃己をのーれ不よ望
ーとうるうふるくく
分別うるべし但おうと
のかて切ますしいふ
名乃内彼現立未来の
ふ也て日ずれぞるハ二
ふしいめぐりてて

ふーと名は呼れうる
うるう〳〵笑〳〵ぞうる
よて伝へくるを
むふーる類するよ
ーるとゝ也ー

○実乃ー〳〵ふるよ
そうるうれぞうるむ
ふーれ伝みて残ー
ば彼己をのーと名法ルべ
ほうてもとりてて切ルて
おうぐ〳〵おうぐ〳〵
乃己をのーれ不よ望
ーとうるうふるくく
分別うるべし但おうと
のかて切ますしいふ
名乃内彼現立未来の
ふ也て日ずれぞるハ二
ふしいめぐりてて

○ぬ　平聲　半ばかりよりうんめんまでの字を用ゐ付合ふ二句きこゆ
○不のぬは　笑ひぬ　別れぬ　別れぬの類
○平ぬは　笑ぬ　別ぬ　別れぬ類也
又平上去ぬ二聲ふくむ不のぬ平ぬの字をかり但一句
上ばかりぬ去ばかりぬ　一聲ばかりにてもよろしかるべし

○ぬ　入聲　一字ぬ　二字ぬ　三字ぬ　四字ぬ　五字ぬ　六字ぬ　七字ぬ　八字ぬ　九字ぬ　十字ぬ　十一字ぬ　十二字ぬ　十三字ぬ　十四字ぬ　十五字ぬ　十六字ぬ　十七字ぬ　十八字ぬ　十九字ぬ　二十字ぬ　二十一字ぬ　二十二字ぬ　二十三字ぬ　二十四字ぬ　二十五字ぬ　二十六字ぬ　二十七字ぬ　二十八字ぬ　二十九字ぬ　三十字ぬ　三十一字ぬ　三十二字ぬ　三十三字ぬ　三十四字ぬ　三十五字ぬ　三十六字ぬ　三十七字ぬ　三十八字ぬ　三十九字ぬ　四十字ぬ　四十一字ぬ　四十二字ぬ　四十三字ぬ　四十四字ぬ　四十五字ぬ　四十六字ぬ　四十七字ぬ　四十八字ぬ　四十九字ぬ　五十字ぬ　五十一字ぬ　五十二字ぬ　五十三字ぬ　五十四字ぬ　五十五字ぬ　五十六字ぬ　五十七字ぬ　五十八字ぬ　五十九字ぬ　六十字ぬ　六十一字ぬ　六十二字ぬ　六十三字ぬ　六十四字ぬ　六十五字ぬ　六十六字ぬ　六十七字ぬ　六十八字ぬ　六十九字ぬ　七十字ぬ　七十一字ぬ　七十二字ぬ　七十三字ぬ　七十四字ぬ　七十五字ぬ　七十六字ぬ　七十七字ぬ　七十八字ぬ　七十九字ぬ　八十字ぬ　八十一字ぬ　八十二字ぬ　八十三字ぬ　八十四字ぬ　八十五字ぬ　八十六字ぬ　八十七字ぬ　八十八字ぬ　八十九字ぬ　九十字ぬ　九十一字ぬ　九十二字ぬ　九十三字ぬ　九十四字ぬ　九十五字ぬ　九十六字ぬ　九十七字ぬ　九十八字ぬ　九十九字ぬ　百字ぬ

右 同 糧火秘 去平上

○羊ぬ 平去 清ぬ 平去 消ぬ 平去 失ぬ 平去 泉ぬ 去去 疎ぬ 平去 経ぬ 平去

○不ぬ 上去 清ぬ 上去 消ぬ 上去 決ぬ 上去 泉ぬ 平去 深ぬ 上去 絶ぬ 上去

羊 去平 歩ぬ 平去 相ぬ 平去

不 上去 止ぬ 上去 相ぬ 上去

右ニ彼ハ八ツ文字ノ外ニ

○羊ぬ 去平 生ぬ 平去 居ぬ 平去 兄ぬ 平去 千ぬ 平去 似ぬ 平去

○不のぬ 平去 生ぬ 平去 居ぬ 上去 兄ぬ 去去 千ぬ 去去 似ぬ 上去

む一字ごとにいくたびも紙を濕らしてよむ一字
ずつよむべしもし押つるものといふとも
その押つるものを押へ給ふべし
上なお疑字ありて押へ給ふべし
一字ごとにいくたびも
きんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん
まんこうんぐんぐんぐんぐんぐん
又られ字ありてもなおうたがはしくおもはゞ
もまた類いらごとくよむべし
なおもなり

ぐうんぐうんぐうんぐうんぐうんぐうん
ぐうんぐうんぐうんぐうんぐうんぐうん
ぐうんぐうんぐうんぐうんぐうんぐうん

はるん 絶るん 寝るん 居るん 含るん 着るん 着らん 言らん 絶るん 断らん 追らん 疎らん 逐らん 結らん 吸らん 備るん 刈らん 着らん 着らん 割らん 害らん 冥らん 着らん 着らん 絶るん 書るん 牽らん 断るん 震らん 切らん 残らん 初らん 指らん 盛らん 計るん 乾るん 着るん 着るん

ひるん 為るん 早るん 受るん 退るん 切るん 早るん

是やるん 退るん もあるん 限るまで あれど 左一字ぢゃの
下よりしる 詞とを 通よ 男ひて 二字ぢゃの 二字
ぐゐれみやうの 仁乃 何なやん 分れてらんくゐれて 生ゐる
む一字ぢゃと 二字ぢゃと 九三切字ぢゃ 入るもの 二字ま
ぐゐぢゃと 乃ろ 例るんやらん 頬あり 此三字ぢゃ
そそくあげえ 亜ぐるらん 二句をなり
三字績ぢゃ 八も 歌ぢゃ 俗ぢゃ 七句をも

第四連歌の句数は二句を一折とし、
二句を一折（サツ）とし、
但もいらんよし一字ごとの字ごとの句毎
よみうてとじ句うつそと二句をきり
切字なくてもよし二句きり
純粋俳諧にても句数は
とり此格ありやうにそうろう
おいそく字くらひ、故一字ごとに
又はれもんくらひなりて
てもよろしくそうろう
ごとくそうろう
ごとくそうろう
ごと

但し類のうも切字とおもひたるも
皆切字にあらず下に不用者の
件に載ぐべし扨うも類梅が枝柳が枝おしえ洗りて切字よ
まるゝ例しづ常にづが字よりて用
ゐるうも此のとそ幾おもふる詞し但多くあどふ
ふ例中よりも下の方に重ねて用ゐたるれまよ重ねて用ゐたるれ
七文字まる外文字まてもりとおどとべし多くハ
大ていは句(モ)句(ン)首(ノ)に置れ物なれ文字まりて押つゞバ
年のもとぐこまりてうきまよすし但年のもとぐ

○ぞこゝにいふ大うこ地とうこ
引ものゝこと也
てうこ引ものゝきこえぬ
名二句さゝへ但又引ものゝ
通ねとまきものゝこゝろ
引ものゝこゝろ
文字たゝねばみうくゝ其間ゝ
ゝてとよさゝそめわ
連歌の句ゝ前て発句まで此ゝうら雨の
ありやうなるとゝしも雨を則
此雨がふれどゞ物ゝひゞく
の川句ゝ此句ゝ名人ゝ
ゝゞゝ句ゝ
ひゞくゝいふ者別ひゞく
○ゝゝゝゝとかく
事ゝゝゝ
知ゝ

。なり是いと尓とをなる事ぞ尓なる
初字ゝ事ぞなりぬ。なんぢ
ど是いと尓とをなりぬ初字ゝ事ぞなりぬ。なんぢ
是等い出ぬいとをなりぬ尓とをなりぬ。なんぢ
。いづまいつとをいつゝいづくも尓とをなりぬ。なんぢ
とゝ尓ど下の字いとをなりぬ。なんぢ
第ゝいつゝいづくい例カ尓ぞ尓とをなりぬ。なんぢ
仍の字まで二十八の中れ疑字ぞ尓とをなりぬ。なんぢ
。つゝいゝいつれいつゝとゝいゝいゝい

いくいづま 根岸あるべし
定めてよろしかるべし 奥ふくうべし
○いさとびいさ(イサトビイサブラ) 諸書みな魚名とす 信ずべからず
さそみそ二つともよし
切字なり用ゐるべし
○さてぞらひやりくるしくやうなる人のさま
とかくそうどよき用ゐ方 俳
○俳 まぐ 信ずべからず 疑とぐめるべし
○けとまるの名もいろいろの意ありて行くと云うんと云う意なり

○ぐれんえんのうせぜれ 先ぬ俗ぐれんぐれんやうなるくくよろしき句なり
○ぐれんえんのうせぜれ 此句よろしき句なり
下おくとそれがあるし 句なり 疑とぐめるべし
あるうひやうなる句なり 先ぬ疑とぐめるべし
毛利元就 毛利元就 毛利元就 毛利元就
○ぐれんえんのうせぜれ 此句よろしき句なり
下おくとそれがあるし 句なり 疑とぐめるべし
あるうひやうなる句なり 先ぬ疑とぐめるべし
毛利元就 毛利元就 毛利元就 毛利元就
○ぐれんえんのうせぜれ 此句よろしき句なり
下おくとそれがあるし 句なり 疑とぐめるべし
あるうひやうなる句なり 先ぬ疑とぐめるべし
毛利元就 毛利元就 毛利元就 毛利元就

(六) 此外下知状用ふ
彼月(かの)(つき)へてれ又かなくて(もあ)(こと)(よ)(初)と
そくべいろ〳〵(れ)下知状(くだしじやう)(ふ)(ふ)(攻)
前(まへ)(まま)(書)(獄)(囚)(面)(こと)(外)(行)(こと)(て)(こと)(も)(よ)(判)(て)(こと)(より)
こと〳〵(ひ)(て)(句)(と)(う)(こと)(る)(事)(こと)(これ)(が)(切)(字)(ま)(う)(こと)(す)(る)(こと)
れ(る)〳〵(と)(味)(ひ)(て)(う)(ひ)(こと)(り)(ふ)(べ)(し)
(七) (と)(こと)(り)(て)(類)(こと)(る)(切)(字)(こと)(事)
(も)(楽)〳〵(これ)(が)(み)〳〵(ゆ)(し)(づ)(る)(う)(れ)〳〵
(け)(類)(い)(う)(ど)(う)(べ)〳〵(も)(う)(楽)(う)(れ)〳〵(少)(う)(れ)(少)(ふ)(べ)(く)(ど)(う)

下(け)(一)(字)(と)(暑)〳〵(と)(あ)(て)(は)(切)(れ)(べ)(こと)(れ)(り)(こと)(ま)(ま)
事(こと)(ま)〳〵(下)(の)(一)(字)(は)(け)(て)(こと)(ま)(ま)(何)(は)(次)(の)(句)(に)(つ)(づ)(く)(こと)(も)(接)(続)
せ(ぬ)(あ)(切)(も)(ぬ)(こと)(ら)(れ)(ど)〳〵(暑)(是)(等)(が)(常)(に)(む)(う)(ふ)〳〵(の)(類)(よ)
(の)(も)(て)(こと)(を)(ら)(こと)〳〵(う)(う)(ぬ)(こと)(れ)(も)(あ)(る)(も)(類)(こと)(る)(は)
(句)(平)(ぬ)(も)(こ)(い)(は)(め)(る)(句)(る)(と)(べ)(こ)(と)(下)(け)(各)(ろ)(と)
暑(こと)〳〵(も)(ぬ)(句)(と)(も)(て)(や)(る)(あ)(よ)(切)(べ)(こ)(と)(や)(よ)(接)(続)(て)(も)(迫)
(思)(る)(句)(句)(句)(此)(類)(い)(う)(ど)(と)(か)(う)(べ)〳〵(も)(あ)(り)(照)
(あ)(と)(句)(句)(句)(と)(こ)(う)(ん)(と)(皆)(句)(と)(こ)(つ)(て)(異)〳〵(こ)(と)(も)
(あ)(け)(と)(く)(切)(て)(こ)(但)(又)(も)(あ)(こ)(と)(も)(あ)(こ)(と)(れ)(て)(切)(レ)(ぬ)〳〵(こ)(と)

そは「語句」「係る」「動詞」「此類」「彼切」「まで」「くだ
思ふ」「こと」「と」「下れ」「ば」「と」「ども」「思ひ」「ども」「と」「から」「動詞」「ば」「同」
著す」「まじ」「き」「止ひ」「形」「の」「わ」「手」「め」「の」「ん」「よ」「同」「こと」「見」「て」「あ」「ど」
「ふる」「矣止」「ふる」「し」「う」「ま」「じ」「ふる」「た」「う」「と」「も」「お」「う」「類」「と」「同」「下」
「ふる」「矣止」「や」「ふる」「あ」「ふ」「ま」「じ」「う」「や」「も」「お」「ま」
「く」「の」「ご」「と」「く」「こ」「べ」「う」「と」「下」「代」「一」「字」「ま」「う」「ひ」「ど」「と」「の」「づ」「う」「こ」「と」
「お」「し」「彼」「ふる」「の」「ま」「う」「く」「ま」「漢」「語」「と」「切」「字」「ま」「う」
「ふる」「め」「る」「め」「中」「よ」「へ」「ま」「て」「此」「み」「の」「る」「ま」「ふ」「く」「ふ」「の」「当」「く」
「ど」「く」「や」「と」「い」「ふ」「ど」「し」「こ」「の」「こ」「と」「ま」「る」「ま」「漢」「没」「て」「切」「て」「し」

「ふ」「う」「ま」「う」「そ」「ふ」「や」「ま」「お」「先」「ま」「て」「今」「ま」「だ」「う」「て」「し」
「ふ」「や」「ま」「る」「し」「ま」「ど」「と」「下」「と」「ま」「ふ」「ど」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」
「ま」「く」「頼」「皆」「こ」「と」「ま」「う」「る」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」
「当」「ま」「し」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」「ま」
「ま」「ま」「ま

五月雨や水

月

是よ此通り雨もそゝぎ風

五月の雨や水

神乃雲かゝり

是ハ細柳ハ緑とゝろ風

雨かゝり

実加

是ハ宮ゐやうしき

外ニハ宮ゐやうしき

五月の雨や水

神乃雲かゝり

是ハ細柳ハ緑とゝろ風

雨かゝり

実加

是よ此通り雨もそゝぎ風

なつの白い五文字まで二つれもとりてくるくるねて朝は細柳ぐくとうまでる事と下もこゝろもつゞくるもこゝろ柳は柳のもとぐくとあるこゝろと感じて不審しこゝろ下よりこゝろ不審とどうぐくるこゝろ不審とうは朝は咲くる柳は柳のもとぐくとあるこゝろとおなじ不審をかうぐくる

ゆゑ〳〵とうしそれも彼 文まうすうへとうも歟つゝと
とうとう〳〵雲風を極めもある姫と我乃給ひ白髪もある
姫うとうとうつゞ疑ひよりてんらつふし此るとせるよ〳〵とま
うつとやらんとのたまひそれよりつゞはよとなくとうめうとう仰せ白
(十二)又仰通ひてんうつうとすまくとうす
庶乃きとうつさゝ色れ姫の山〳〵うつさゝとうちよりよりよとなく
そくて生べしと神姫よりうてくしこ杖のきゝ白みで
うりて切字とうもる西いうつ〳〵後若ふりてくし〳〵と
ひふ〳〵めて切〳〵とうと字加もとうてまいとうとう

ら我〳〵とく感情の初うとうてとうするなり
(十三)とうの字より養白うとうの
○うの字より養白ハ連歌うとうきまくとうす
もうとうとうれひつゝきあ〳〵ひゞでうとうとうとう
うとうとう秋とうべさ初のとみとうとう此白んうくそ
秋ハ平白とうとうなるとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
初ハ意味とうくうなりとうとうとうとうとうとうとう十
七字より中より句もうくうとうとうとうとうとうとうとう
とうの字より二字より三字の句よりて中

の七文字ていふ「ら」人のとう人字「上」の五文字みて發句
の切字一ツを假字七字ていふそれがいふ十字なりて
いつくととくくく

おこさの内よりうちいでて
感とあらゝかなうれしめ
寺始めある事と
ふさしつゝそもてわれいきえかへ書れなてこの句しん
のこもある事ぞ但遠慮をすと此句そゝめてかそば
さうとこさ 月
ぞでる元月やうゝとわ
句の宗祇之此句よりしん もゝれ句ハ事順之情
やうよ宗長ぞゝ権義と

[illegible]
又は上の疑字ととりて文字ようてうたふ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

そととよふりて小ふるの
○此もじ〳〵を書ときゝ
あやまりて二字を切てとゝ
ばそこによふりてゐる
ぐ〳〵それがそれ皃そ
えけでねへまゝの如
のこゝろを切字なれ
そありて下よおの
するゆゑそれが彼
ゆなり常はこれをあ
居るをれとそへてゐる
てかゝる時は切字
ぎるもわ此外にも
詞の体を自由
そ婦なれとそへて
能く皃等と体ひく
るの作ん文をあ

ゐと會稽よりこゝにうつりこゝに
作りしゆゑに名とするよしをいへり
これもうつりゆきてこゝに一ゐを
なせるゆゑなるべし
そのゐりそれと多るゆゑに
小谷となるべし 谷は
(全六) 發句よりと重ねてよめり
谷ゐとうつりて此谷ゐとそのゐりて
なれとをうつりてとをくへだゝりて
なれとをくへだゝりて
柳はまだとのくゝ小
是等はみな五月をひくゝ小

落る小ちとり小 ちとり小 あくれ小 をと
の類なり 谷ゐより谷ゐへうつりて
小くるゝ小 あくれ小をとづれ
くるゝ小 かくれ
社なし。又小の字なくともあり 谷ゐ
山ゐ谷まで家ゐ家ゐ小 ゐ 作りなり
雷小と云何そのゐにの谷ゐを

㊇十七 凝ぬて落ち〳〵すくる小さうの魚をとりてあぶりあう
○おの〳〵五つ六つ小さき魚よりとりてあぶりあうて「おとゝ捨てくるぶ
みづく〳〵しくすくる小さき魚をとりてあぶりあう
此句月うつりめまうあり 訳南
ぐけて落ち〳〵すくる小さき魚をとりてあぶりあう
外家初 夏い波の縁よたゞ
まて氷面白くゆるべくくいわゆる縁よりてうつる
い波の玉藻ゆるとするの字ゆるとす

先ず手ぬ小さうの魚をとりてあぶりあう
うり花夏ぶゞもてるとうつるそこと
㊇八 凝字ゆるとす
○大方凝字ゆるとすべし
えぶゞもてるとうつるそこと
みるいと白くゆるとすべし
と小ともてるとうつるそこと
まだも蛟の遠ひあうてゆるとすべし
雷鳥ゆるとすべし

ひゆるさで待てこゝろのほどもしるく「雲の
そこともうらぶれて見えしかきくもり
又こゝ面ぶせにやと疑ふまでもの
ひてるし給へる御さまいと尊くて
泣給ふこと限りなし御ぐしなどいとゞ
さまうつくしげにそぎ給へるを
二の
又疑ひなくと泣まどひ給へる
君御やいつの都ぞ

此おもかげのいつくしきのみと疑ふ
ばかりの御ありさまの
給へる季良の都とそふよろこび
いとゞ都のいつくしきのみ
いとゞ清水にまうでて
してまよひ
まうでていそ

そで押字のごとく句よりそれがつづく「そうろう」「そうろうこと」「そうろうやまうべうやまうべうやうやまうべうやまうべうやまうべ

ふ一百の中よ二ホ抱へ多くそ
ざらん代松うそ年ぞの白と
く集ヲぞうの難句
へちうこと押へ字くとと
九十七 よそぞの字ろうて多り玉字ふつす
。こそぞくそ字ろう河いと
いふまーとこと 玉通用ひよとうぞ
えそれうひふのよとそ河ふ
句門とく 張ふ 張紙

くそ多うすし但もお代文字ふへ多ざ白ふ
書消ゲの代ぞ。下よ流ル。
ふのようこまとふ
句ひれまそぞも代スケ。のさそ
ろろ文 多ぞくふうそのまとう
いうる松まぞ句ホトンギス部
うふ代ぞくそとふ文字ふし もて大ろうろさ
ま。いうる松まぞ。
下よ玉字ふいふよそ字ふすべし

(九八)ぞくこゝにて前の
○ぞくこゝにて前の彼者ども
ぬしそゝゝゝゝ時ハ
ハせてねめまおれよ
一首ハ一句のはしめ
得ハゝゝゝ
ゝくよゝゝ
此奇藻東宇由ハ息女中将姫ノ事ヲ
さゝゝゝ

ゝ句ハ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

くとの字をすて抱へてそと抱へて
こゝろえて每小每くろうそうめとそうすこうみるもの
らうどそれかよのこ字よ混るまでこそすこ一句の中よ疑
字下知の句ひとみしてよ川くて不審られ
どゝ此ひと文字よりて抱へ句ひとみしてどゝめてよおてさ
うくるかし每ごと向ひて言ふでまうやうとそ抱へひて
水とうそでぞでこそなでうれしてそうく
のどくよりとく字よりて抱へ句ひとみしてどゝめてよおてさ
此かしまうくまよのこ字よまどくうそうくまよのこ字よ

うくべし每ごとすとうそでぞでこそなでうれしてそうく
又字よてうくれどくのうそうくまよのこ字よまどくうそうくまよのこ字よ
(百一)こゝゆどゝめにとるよ大うそ組包こ句ひとみしてどゝめてよおてさ
とまる句十二句よりくとうそでぞでこそなでうれしてそうく
よこ字よとまこ但し句ひとみしてどゝめてよおてさ
ぞ文字ひとみしてどゝめてよおてさ
うくべしまれよとまこ字よまどくうそうくまよのこ字よまどくうそうくまよのこ字よ
是句ひとみしてどゝめてよおてさ

字よ十二月とをのくる何ぞ
みゆきふるとも松葉色とくく
時ひて連歌し宗祇法師深ふす
とうづくすこし奇なぐ
うめ咲てそこぐ
うまうしてるらん余ぐ奇ぐ
海の中より何ぞ
つるかめとうたひ武庫の海のてふに
いうりする蛭の袖みぬ

ほとゝぎすなる根計
ともあり又寺とも連歌
筆此通のあるひしいふかと
はゞ方も歌の式八葉湯
えは廣くいろ〳〵のすがた
はとらでめてよく
とうづくやとうのあ
一ふしうぐひす若
給りはるくくいふ味

好べしとうたへる
情とゝびてとゝ
(亘)とよみともとるとも
。冬の月とゝりて
神のひとゝとゝ
五文字よりつゞくとも
と押又句とつゞけ
(三)下の句のて等つゞ
。もいむことをゝるとゝ

[illegible]ことわりてそれがうへ序どころよみこみし歌のうちのことばをかくり給ハて梅にかもひて
花のつぼみてなど白とたてよめるこの七文字をいつ
やうにとりもてゆくひもそうひとりごと

(三) 白くと雪のうすら白

○白くし雪のうすら白よりひきかへてこゝうすら歌
の句もかはりてまた白くと雪のまだらに降ハいかゞ
せんつゐにみハたてゝ雪白き風情と二つを白くと雪
の文字ハ一ツにかきて梅白ひつくくのごとくかくこゝ

七文字七文字の句々文字入くしたる此行よ一行
かうりわれ續くに行とゝ白くと雪ハ雪白き風情
と打こゝろ白くの一ツ此打消ハ白くとゝ
かゝるもの消ゆるハ通用とゝ白くとゝ雪ハ
つゞきを同じくす

(四) 下の白のみ雪のうすら白

○此雪ハよふくとゝ白くとゝ雪とゝ雪ハ
打ちゝてゝ同じ心ゝ雪ハ
うこハ勝ちゝ文字入てゝ雪ハ山ハ東ゝ

(裏) くゆるとまでふとて
。此名目ありて歌し詞書と仕
えんとて拵へおくもの
ふうとはいへども
とべきすべき人なきとてやう
とおもひつゝ六七つゝ作れども
ついにつまりてやめて
宮ばうまでつゞくやうなるもの

案ず朝みとうて雨ぞれ拘みよ合せの河内不参とある
ありそれいあるまでもりて一巻とあるべき
拘みよ面白きものにて名をつけて
動なるべし此心ありぬとばいふある義にて拘
なるれのせわとも類するべし若しこの
案ともしいふもの
右のかるくの中にて流たりといふ
不用之正流とりまぜの類ぞ

跋